

研究ノート：

生き物と自然から学ぶ領域「環境」

*大久保 嘉 雄

(2017年12月27日受理)

The Field of “Environment” to Learn from Life and Nature

Yoshio OKUBO

Key words：環境 草花 フィールドビンゴ 種子散布

1.はじめに

幼稚園教育要領と幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針における領域「環境」に示された内容の項目には、多様な「環境」の取り組みが述べられている。保育者を目指す学生に領域「環境」を教授する際、最も伝えたいことは、保育者自身が最高の環境だということである。それは、子どものそばにいる保育者の保育に対する考え方が子どもの環境を形作る根源だからである。あらためて、人的環境である保育者の重要性を記しておきたい。

さて、前述の要領や指針（3歳以上児）の領域「環境」の内容は11項目または12項目あるが、そのうちの4項目に「自然」や「動植物」の記載がある。そこには、自然や生き物と接することが子どもの成長に大きく寄与することがうかがれる。特に、生き物は38億年の生命の歴史を背負って、その不思議を大人にも子どもにも示してくれる。すなわち、進化のたまものであり、「もの」からは得にくい。また、自然の変化するさまも、同じような恩恵を与えてくれる。

保育者を目指す学生は、子どもの頃にどれほどの生き物や自然の体験をしてきただろうか。自然豊かな田舎においても、野外で自然や生き物に触れる機会が少なくなっているのは、今の子どもも大人も、

程度の差はあれ同じだろう。自然や生き物体験の少ない保育者が、未体験の子どもに接する場面を想像するとき、一抹の不安を感じる。

近年の小学校から高等学校の授業における「生き物」や「自然」の体験は、脆弱なものである。それは、小学校の教員の多くが理科に苦手意識を持っていることや、中学校と高等学校では実験や実習が少なくなったこと（野外実習は皆無だろう）が原因であることは、以前から指摘されている。そのような環境で育ったものが教員になった場合、同じことが繰り返されるだろう。しかし、見方を変えたり工夫次第では、身近な生き物や自然のおもしろさを伝えたり、観る目を育てることができる。このことを幼児教育の段階から実践できるなら、上述の悪循環の改善に多少なりとも寄与できる。その意味では、保育者養成機関の役割と、その期待は大きい。

本稿では、生き物や自然から学ぶことを念頭にした取り組みから、人的環境である保育者の資質向上を目指した領域「環境」の教授法を論じる。

2. 教授法の検討

(1) 保育内容指導法（環境）の内容

現在、保育内容指導法（環境）という科目名で演習を行っている。隔週に実施し、一年間で15回とな

*仁愛女子短期大学 非常勤講師

る。授業の形態は、一時限の前半に内容を学び、後半に実習を行うことを基本としている。また、実習の成果を課題として提出させている。課題は授業中に完成できるようにしているが、未完成の時や月の観察など宿題になるものもある。課題の多くはスケッチブックに描いて、まとめさせている。

15回の内容は、人的環境である保育者が、生き物や自然を題材にしてどのように「環境」に取り組むかを主題に展開している。生き物や自然を出発点としているが、それ以外の子どもを取りまく環境に発展するのはいうまでもない。表1に2017年度の授業内容を示した。

15回の授業は、自然の移り変わりや四季の行事の順に並べてある。草花の栽培や観察、フィールドビンゴなど屋外の実習は天候や時期により変更もある。生き物や自然は常に変化するので取り扱いにくい。それゆえに、率直な疑問や不思議が子どもばかりでなく保育者にも芽生えやすく、おもしろさや楽しさにつながる。この心情は特有のものであり、人

表1 授業の内容—2017年度—

回	内容、課題	時期
1	領域「環境」の概要、草花の鉢植えのしかた	4月上旬
2	草花の播種（実習） 課題1 草花の栽培の記録（～7月上旬）	4月中旬
3	春の七草、春の草花の観察（実習） 課題2 私の春の草花を一種紹介する	5月上旬
4	フィールドビンゴ（実習） 課題3 フィールドビンゴを作ろう	5月中旬～下旬
5	暦、五節句と二十四節気 課題4 季節の行事を表現しよう	6月上旬
6	七夕、文部省唱歌「たなばた」 七夕飾りを作ろう（実習） 課題5 雲と月の観察	6月中旬
7	いろいろな昆虫1 昆虫折り紙（実習、課題6）	6月下旬～7月上旬
8	いろいろな昆虫2、唱歌「虫の声」	7月中旬
9	秋の七草、秋の草花の観察（実習） 課題7 フィールドビンゴを作ろう （夏の幼稚園実習後に再度作成）	9月下旬
10	どんぐりで遊ぼう 課題8 童謡「どんぐりころころ」の三番を作ろう	10月中旬
11	どんぐりでおもちゃを作ろう（課題9）	10月下旬
12	光と色の三原色、色水の混合（実習）	11月中旬
13	危険な昆虫、小麦粘土でアリや他の動物を作ろう（実習、課題10）	11月下旬
14	フレーベルの恩物 課題11 動くおもちゃ作り	12月上旬～中旬
15	班別プレゼンテーション、相互評価	1月上旬～中旬

間の心の成長には欠かせない。学生が今まで学んできた知識や経験と、この心情を結びつける試みも紹介する。

(2) 授業の実際とねらい、つまずき

体験から学ぶことを第一に考えている。その際、つまずいてこそ成長がある。また、今回はアンケート等による情意の評価は行わず、学生の感想や行動から問題点や改善策を模索した。主観的な表現になりがちであることをお許し願いたい。

①草花を育てる 4月中旬～7月上旬

〈実際〉草花を植木鉢で播種から開花まで育て、そのようすをスケッチブックにまとめる（図1）。

《ねらい》

- (i) 種子から開花・結実までのようすを観察することにより、植物の生活史を体験的に学ぶ。
- (ii) 培養土や播種、水やりなど基本的なことを学び、植物の成長に必要なものを実感する。
- (iii) 子どもと一緒に育てる設定で、子どもとの会話を想定しながら接し方を考える。

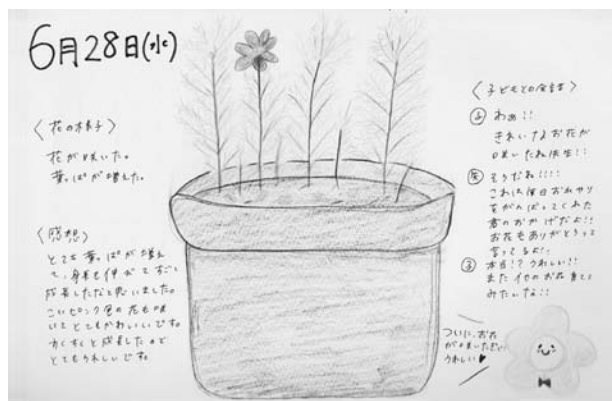


図1 草花の栽培の課題—スケッチブック—
子どもと一緒に育てる想定で会話も書いた。

表2 鉢植えの草花一覧—2017年度—

草花	鉢数	開花鉢数	草花	鉢数	開花鉢数
ミニヒマワリ	20	19	オダマキ	1	0
ヒマワリ	16	4	カシ米尔	1	0
マリーゴールド	13	9	金魚草	1	1
コスモス	14	11	きんせんか	1	0
百日草	9	6	ナデシコ	1	0
アスター	8	0	ポピー	1	1
マツバボタン	4	2	マツバボタン	1	1
アサガオ	4	3	ラベンダー	1	0
かすみ草	3	1	アグロステンマ	1	1

ほとんどの学生にとって、小学校第一学年生活科でのアサガオの栽培以来の体験である。その時は市販の培養土を使っただろうが、授業では土の配合から始める。赤玉土と腐葉土を配合して、排水性・通気性と保水性を保つ。二つの性質は相反するようと思われるが、赤玉土や腐葉土のすき間を水や空気が通り、赤玉土の粒に水が浸透する。原理を理解して体験することが大切である。さらに、根腐れを防ぐために鉢底石を置くことや、種子の1～2倍の土をかぶせること、種子袋に記載のある草丈に応じて6号鉢から8号鉢を選択することなどを体験する。

表2は、学生が選んだ草花のリストと数である。開花した鉢の数も載せてある。

【つまずき】ヒマワリは最も人気があるが、鉢で開花させる場合はミニヒマワリがよい。草丈が低く鉢に適しているのだろう。開花率がよい。しかし、ふつうのヒマワリと同様、開花する頃には下葉が枯れあがる。成長不良の茎に多くの枯葉がついた状態で開花するため見栄えがよくない(図2)。畑に植えたふつうのヒマワリは、鉢植えと比較してみると元気がよい。ミニヒマワリとはいえ、プランターのような大きい入れ物で栽培するのがよいだろう。狭い鉢での根の育て方や水やりの間隔に留意しなければいけない品種である。

多くの学生は、種子を播きすぎて芽生えが鉢一杯になってしまう。間引きの必要性和その意味を助言するが、引き抜くことに躊躇があるため密植が解消されない場合が多い。そのような状態で花芽形成を迎えると、低い草丈で花の少ない貧弱な個体の集まりになる。一方、草丈の低いマリーゴールドやマツ



図2 鉢植えの草花のようすー7月上旬ー
 左手奥の畑に野菜やヒマワリ(草丈約2m)。
 右上はミニヒマワリの鉢植え。開花の頃には葉が枯れ
 てしまい見栄えがよくない。

バボタン、百日草などは、発芽しやすく育てやすい。また、高密度でも成長に対する悪影響は少ない。

種によっては発芽が遅れたり、発芽しなかったりする。深植えが原因と予想される。時期を見て、育てやすい種を再び播種するように助言する。

7月中に開花しないものもある。多年草のナデシコやラベンダーは、播種一年目は栄養成長だけだった。種子が極端に小さいトルコギキョウは、別の苗床で発芽させた後に移植しなければならない。

トマトやキュウリなどの野菜を選ぶ学生もいる。植木鉢の横の畑で栽培することになる。学生はいきなり畑に播種するが、成長はよくない。本来は、育苗ポットに播種した後、苗を移植する。野菜の栽培は作物としての意味があるが、一つの鉢で種子から開花までの生活史を追えないところが難点である。それでも、インゲンやダイズなどの豆類は大きめの鉢で開花・結実に成功している。豆類は畑に直播きしてもよい作物である。

この演習は、学生に好評である。成長の楽しみや開花のうれしさ、自分が育てたというやりがいや根気強さの必要性をレポートに書いている。小さな種子から大きく成長し、きれいな花を咲かせるということに不思議や神秘を感じた学生もいる。子どもと一緒に育てて大きくならない時の声かけまで考えた学生もいる。多分、自身の不安の実体験からだろう。生き物を育てることを通した「環境」の体験となったと思う。また、つまずきの中でも考えたり工夫する気持ちを自分の中に育てて欲しい。



図3 草花の観察
 ブタナ(左)は花茎が分かれて複数の頭花をつけるが、タンポポ(右;外来種との雑種)は1本の花茎に1つの頭花をつける。

②草花の観察、草花遊び 5月上旬、9月下旬
〈実際〉野外で身近な植物を観察したり、草花遊び
を体験する。

《ねらい》

- (i) 身のまわりの植物の特徴を知り、その生活のしかたに関心を持つ。
- (ii) 草花遊びを体験したり、春や秋の七草について学ぶことにより、植物の文化を実感する。

春の草花の野外観察は、短大敷地内から附属幼稚園の横を通り、九頭竜川右岸の堤防と河川敷へ至る道筋で行う。約30分のコースである。小川や堤防、河川敷、畑地、グラウンドに多種類の植物が見られる。野外での植物観察は小学校以来の体験であり、雑草としか認識していなかった植物の名前や話題が新鮮なのだろうか、好評である。ただし、1クラス約40人の学生数は、野外観察には多すぎる。観察する植物を教室でスクリーンに映して解説し、チェックシートを持たせ、小集団で解説する。

ブタナとタンポポの見分け方(図3)、カラスノエンドウとスズメノエンドウの大きさのちがい、小判のような花穂のコバンソウ、カタバミの葉と家紋、中空の茎がハルジオンの春先の早い成長を支えていること、ロゼット葉をもつタンポポやオオバコは踏みつけに強いこと、ひっつき虫のヤムグラやカラスノエンドウの笛の草花遊び(図4)など、興味がわきそうな話題と共に学ぶ。種名を覚えるのではなく、その特徴や生活のしかた、人間の生活との関わりを学ぶことに主眼を置いている。そのことが、学生の好奇心や探究心を喚起させ、保育者として子どもに接するときの心構えとなることを期待している。この単元の課題は、自分の春の草花を一種選び、名前の由来や特徴、生活のしかたを紹介する。得意な春の草花を一つ身につければ自信にもなり、

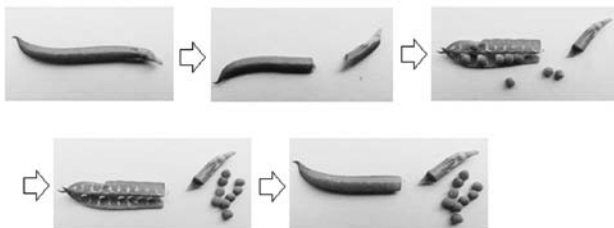


図4 カラスノエンドウの笛の作り方

他の草花と比べることもできるようになる。

教室では、春の七草の紹介や七草クイズ、植物の簡単な分類(単子葉類と双子葉類、離弁花類と合弁類)を学ぶ。イネ科の平行脈の葉、キク科とアブラナ科、マメ科の花のつくりが分かれば、たいていの草花は何の仲間か見当がつく。中学校理科の復習的な内容ではあるが、野外での観察と結びついているので実感しやすい。

後期の最初の授業は9月下旬である。野外での観察には少し遅めなので、早速、「秋の草花・秋の七草」を始める。春と同じような形態で授業と実習を進める。秋にはひっつき虫が増える。オナモミやアメリカセンダングサ、イノコズチ、ミズヒキなどのひっつき虫を中心に、観察を行う。2回目の野外観察なので新鮮さがなく、春よりは意欲が低くなりがちである。主体的に観察するカードゲーム形式の取り組みを工夫する必要がある。草花遊びができる植物や花を觀賞する秋の七草はこども園や幼稚園の敷地内に植えておくと、子どもの興味を引いたり、「環境」の題材になるだろう。それぞれの植物の生えている環境(陽当たりや湿り気、土のようすなど)を観察しておく、園内のどこが生育適地なのかも見分けられるだろう。いつも生き物や自然におもしろさや楽しさを見つける保育者であって欲しい。

カラスノエンドウは園内にあるとよい。その果実は野菜のエンドウと似ている。さやの中の種子も、マメ科特有の花も、果実の笛づくりもできる。道ばたや空き地で果実がなる頃は、除草剤散布の時期と重なり、口に入れるには危険である。

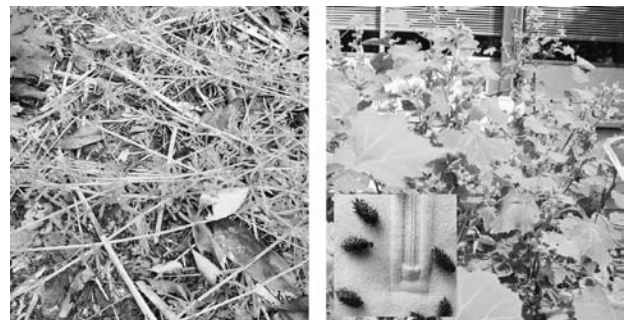


図5 ひっつき虫
左はヤムグラ(春)、右はオナモミ(秋)

③フィールドビンゴ 5月中旬～下旬
 〈実際〉フィールドビンゴカードを使い、五感で野
 外の生き物や自然を感じる体験を行う。

《ねらい》

- (i) さまざまな感覚を使って生き物や自然を探す
 体験により観察力を高める。
- (ii) 自作のフィールドビンゴカードを作成し、子
 どもとの会話を想定しながら接し方を考える。

(公社)日本シェアリングネイチャー協会の
 フィールドビンゴカード(図6左)を使い、短大敷
 地内で野外体験を行う。カードは幼児用から大人用
 まで数種類あるが、一番簡単な3×3コマのキッズ
 カードを使用する。教室に帰ってから自作のフィー
 ルドビンゴカードを作成することと、子どもとの会
 話も想定することを伝えておく。

フィールドビンゴは、野外で様々な感覚を研ぎ澄
 ますとともに、生き物や自然に対する観察力を高め
 たり、その巧妙さに気づく体験である。アリや鳥の
 声、花のにおい、ちくちく痛いトゲなど、見るもの
 や聞くもの、臭い、触るなどの体験を、他の人に自
 分の言葉で伝えることにもなる。大人が気がつかな
 かったことを発見するかも知れない。子どもと一緒
 に生き物や自然を学ぶことのできる体験である。

この取り組みは5月に行っている。その後、9月
 の幼稚園教育実習を体験し、再びビンゴカードを作
 る。幼稚園の屋内や中庭で行うことを想定する。子
 どもと接した体験を思い出しながら、よりよいも
 のができた(図6右)。体験を重ねる中に成長があ

る。また、宝探しのなものにも応用したカードもあ
 り、自由な発想のできる素材である。なお、本物の
 ビンゴカードのように穴を開けることのできる白紙
 カードも市販されている。子どもが絵を描くには小
 さめだが、子どもどうしが自作のカードを交換して
 楽しむこともできる。

④どんぐりで遊ぼう 10月中旬
 〈実際〉どんぐりを使ったおもちゃを制作したり、
 童謡「どんぐりころころ」の三番の歌詞を
 考える。

《ねらい》

- (i) どんぐりをつくる樹木の生活しかたを学ぶ。
- (ii) どんぐりのおもちゃ作りや、童謡に三番の歌
 詞を加えて表現する。

誰でも、秋のどんぐり拾いを経験したことがある
 だろう。拾ってきた長球と球のどんぐりを見せて、
 「どんぐりはどちらですか」と学生に問うと、ほと
 んどが長球と答える。どんぐりはブナ科樹木の堅果
 の総称で、殻斗も含めて多様な形や大きさがある。

図7は「吉野・大峰フィールドノート」のどんぐり
 図鑑の一画面である。授業では、この図から福井
 県のどんぐりを紹介する。平野部に自生するどんぐり
 なら、コナラやシラカシ(上段)が長球、クヌギ
 やアベマキ(下段)が球である。自然の丘陵を利用
 した郊外の大きな公園なら落葉樹のコナラやクヌギ
 などのどんぐりが拾える。10月上旬から拾えるが、
 下旬になるとイノシシとの競争になる。市街地の公
 園や街路では常緑樹のシラカシのどんぐりが拾え

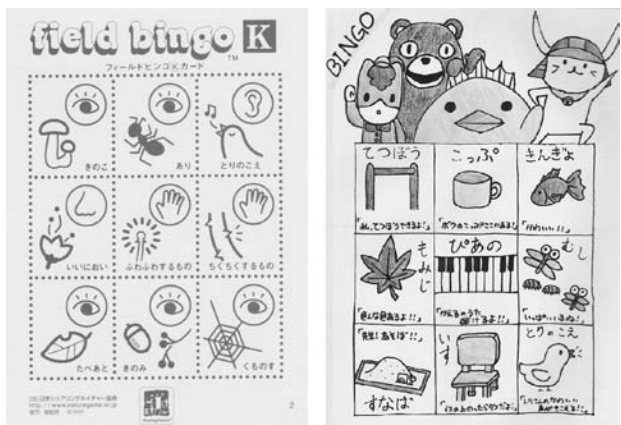


図6 フィールドビンゴカード
 左は市販のカード。右は幼稚園教育実習後の学生自作
 のカード。



図7 いろいろなどんぐりー吉野・大峰フィールドノートから引用ー
<http://www.enyatotto.com/donguri/index.html>
 本文に出てくるどんぐりの種名を書き加えた。
 (落)は落葉樹、(常)は常緑樹である。

る。落下時期は、落葉樹より少し遅い。

また、形がどんぐりらしくないが、スタジイの堅果（上段右）もどんぐりの仲間である。神社や公園で拾って食べたことのある人もいるだろう。福井県では嶺南地方や嶺北地方の海岸寄り（あわら市や坂井市三国町）の平野部に自生する。

山地帯には、ツキノワグマが冬眠前の栄養蓄積のために好んで食べるブナ（下段右）がある。豊凶現象があり、ミズナラ（中段右）と同時に不作の年には、ツキノワグマが食べ物を求めて里地に大量出没することがある。福井県ではこのような年に、初捕獲の場合は奥山放獣、2回目は捕殺の原則がある。ツキノワグマは臆病なので人の気配で逃げていくと言われるが、近頃は里慣れしているので、少し危険性は増したかも知れない。里慣れの原因は、里山が放置されて藪になり、気づかれずに民家近くまで食べ物を求めて来るためだという。どんぐり一つでも生き物のつながりや自然のしくみが学べる。

授業は、童謡「どんぐりころころ」から始まる。この歌は大正時代に青木存義により作詞された。どんぐりとドジョウが登場するが、二番の「泣いてはドジョウを困らせた」で終わる。歌っているときは気にならないが、物語としてみると中途半端な結末とも思える。作者の意図があるのだろうが、三番を作った人がいる。1986年（昭和61年）、作曲家の岩河三郎が三部合唱曲用に本作品を編曲した際に付け足したという。

どんぐりころころ 泣いてたら 仲良しこりすが
とんできて 落ち葉にくるんで おんぶして
急いでお山に連れてった

この作者は、リスに母の愛情を表現したという。なぜ、リスなのだろうか。実は的を射ている。

どんぐりはリスに食べられるのだから、リスは天敵のはずである。しかし、食べられるだけでない。リスは、どんぐりを林床の枯葉の下にまとめて隠しておく行動を行う。分散貯蔵という。後で食べるのだが、食べずに放っておくこともある。その場所のどんぐりは発芽して、次世代の木が育つ。実は、ど

んぐりにとってリスは分布域を広げてくれる相棒なのである。このしくみをパワーポイントのアニメーションで見せている。「落ち葉にくるんで」のくだりは、落ち葉の下にどんぐりを隠す行動である。「お山に連れてった」は遠くに隠したり、隠し場所を忘れてどんぐりの次世代が遠くで育つことへとつながっている。作者が分散貯蔵による繁殖戦略を知っていたのかは分からない。多分、自然観察力に富んだ人で、リスが前肢でどんぐりを持つさまや枯葉に隠すようすを興味深く観察していたのだと思う。

種子散布型については、数研出版の高等学校新編生物基礎の教科書にも取り上げられている。植物がどのような戦略で種子を散布して生息域を広げるかである。「どんぐりころころ」と転がるさまは、重力散布型と名付けられる。自然に落ちて転がっていくだけだが、後述の風散布型に対する語句である。

前述の「ひつつき虫」は動物散布型である。草花の観察では、ヤエムグラやオナモミ、アメリカセンダングサ、ミズヒキなどのひつつき虫体験を行う。それらは体に付着して運ばれる種子であるが、鳥に食べられて未消化の種子が糞とともに排出されるのも動物散布型の例である。消化管を通った種子の方が発芽率がよいという実験結果もある。植物側からすると、美味しそうな色で甘い果肉を持つことは動物に散布してもらう戦略でもある。モチノキは鳥類に運ばれ、スマレはアリに運ばれる動物散布型である。スマレの種子の先端にはエライオソームというアリの好む物質が付いている。アリの巣穴に運ばれた後、エライオソームは食べられるが、種子は食べられずに発芽するのである。

冠毛のあるタンポポの種子（図8左）は、風散布型である。タンポポのように毛のある種子は風散布種子と想像できるだろう。タンポポと同じキク科植



図8 風散布型の種子
左はタンポポ（冠毛）、右はボダイジュ（翼）

物に多い。翼をもつカエデやマツ、ボダイジュ(図8右)も風散布型である。

このように、童謡「どんぐりころころ」から植物の生活のしかた(種子散布型の戦略)にまで内容を広げることができる。このようなものは知識でなく、童謡や生活の中で気づきと共に学ぶものである。不思議とおもしろさとともに生き物を理解する心を保育者自身の中に育てることが、子どもにより豊かな学びを提供する源である。

授業では、もうひとりの登場人物のドジョウも紹介する。口は下を向いている。泥と一緒に底生動物を食べるために下向きである。口のまわりに5対のひげがある。味やにおいを感じる味蕾という感覚器官をもち、泥の中の食べ物を見分ける。池の底にすんでいるので、天敵から逃れるために泥にもぐりやすい円筒状の体型をしている。このように、生き物は生活場所と形態と生活のしかたの三つの視点から観ると、より深く理解することができる。この視点が身につくと、子どもと一緒に楽しく生き物を観ることのできる保育者になれるはずである。

さて、学生が独自に作った三番の歌詞は、スケッチブックにその絵と一緒に表現する(図9)。第三の登場人物に鳥を選び、どんぐりを運ばせたのは、前述の鳥散布種子を学んだからかも知れない。実際、森林ではカケスやホシガラス(カラス科)が種子運搬者である。二番までのストーリーがあるので、結末を考えながら作詞する作業は取り組みやすかったのか、意欲的であり、秀作が多かった。



図9 童謡「どんぐりころころ」の三番
二番の歌詞を受けて三番を自作した。左は小鳥を、右は紅葉を登場させている。

また、どんぐりを題材にしたおもちゃも、歌を歌う導入や歌いながら使う工夫も見られた(図10)。

どんぐりは、生き物と歌とおもちゃ、紙芝居などの複合できる素材である。他にも授業に童謡を使う場面は、昆虫の単元で「虫の声」、七夕で「たなばたさま」がある。この題材もどんぐりのように幅を広げる工夫を行っている。

3. おわりに

ふと見た生き物や自然に不思議の目を向け、おもしろさを感じる保育者なら、それを子どもに伝えたいと思うはずである。そこには、豊かな学びがある。保育者を目指す学生もまた、楽しみながら生き物や自然から学ぶことができるように、授業内容を吟味している。その際、重視するのは体験と見方である。

社会や生活の変化により、生き物や自然と接する体験が少なくなったことは否めない。しかし、身近な生き物や自然でも、そのような体験ができるように工夫している。また、今までの受けてきた学校教育で学んだ知識を生かして、生き物や自然を理解して楽しむ見方を考えている。

草花を栽培するとき、枯らすことも貴重な体験である。生き物を育てる難しさを学ぶ機会になる。草花遊びでは、笛作りやひつつき虫を体験する。市販のカードでフィールドビンゴを体験し、自作する。童謡「どんぐりころころ」の三番を創作紙芝居にし



図10 どんぐりを題材にしたおもちゃ作り
左はビッグパズル紙芝居、右は菓子箱で作ったどんぐり転がし

たり、どんぐりのおもちゃを作る。そのような体験の中をつまづきや工夫にこそ、学びがある。

話題にした生き物は、三つの視点（生活場所や形態、生活のしかたの）を関連づけて説明する。そうすると、不思議が解かれて、おもしろさを見いだすことができる。知識より見方が生きる場面である。それに体験を加えて、自ら学ぶ力を身につける。その力を持つ者が、子どもの成長や学びを支援できる。

生き物や自然は、だれにでも等しくその姿を見せてくれる。しかし、観ようとしなければ見えない。それは、大人も子どもも同じである。保育者が知っていることは、話しながら子どもの興味や能力を引き出し、知らないことは「調べてみよう」と一緒に学ぶ気持ちこそが、保育者の資質である。教育は教師と子どもが共に学びあうものでもあり、それがお

互いの成長につながる。そこに、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」が幼児教育にも見いだされる。

日本人は、自然と共生するとともに畏敬の念を育んできた。それは、自然豊かな日本で、これからも継承されるべき財産である。そこに、生き物と自然から学ぶ領域「環境」の題材を求め、保育者の資質向上につなげたい。

4. 参 考

- 無藤隆監修(2007)事例で学ぶ保育内容 領域環境 (福元真由美編), pp209. 萌文書林, 東京
中沢和子 (2008)〈新訂〉子どもと環境, pp154. 萌文書林, 東京
奥村典子・堀越亜希子(2015)保育者養成課程における領域「環境」の教授法の検討. 関東短期大学 紀要57: 42-56